様子を表す言葉

名前

様子を表す言葉は、自分が話をしたり、作文を書いたりする時に、伝えたいことを分かりやすく、そして生き生きとしたものに変えてくれます。また、読んだり聞いたりする時にも、心情を想像したり、様子を想像する材料になります。とっても大事で役立つ言葉なんですよ。

【1】（　）の中にぴったりの言葉を［　　］から選んで記号を書きましょう。

① ひらひら（　）
② みしみし（　）
③ よたよた（　）
④ よちよち（　）
⑤ ちょろちょろ（　）

ア おじいさんが歩く
イ ゆかがきしむ
ウ 赤ちゃんが歩く
エ 花びらがまう
オ 小川が流れる

【2】（　　）に入る言葉を、文章に合うように［　　］から選んで書ましょう。

① 今日は、朝から小雨が（　　）とふっていました。学校に着いたとき（　　）な青空が広がり、西の空には（　　）な虹があらわれました。

色あざやかな　しとしと　真っ赤な　真っ青な　ざあざあ

② 山の頂上から見下ろすと（　　）人が小さく見えました。自分がまるで、（　　）思えました。

大男のように　魚のように　ありのように　母のように

③ ある日のことでした。子だぬきは、（　　）と静まり返った森の中で母さんだぬきの帰りを待ちました。（　　）と葉っぱがこすれる音がするたびに、子だぬきの心臓は（　　）と大きな音をひびかせるのでした。……

ペタペタ　カサカサ　バタン　ドッキン　シーン　ワーワー

ここで使った様子を表す言葉には次のようなものがあります。

◆擬音語

音を表す言葉で「犬がワンワンとほえた」「ドアをバタンと閉める」「ピーと終了の笛がなりひびいた」などがあります。カタカナで書くこともあります。

◆擬態語

様子を表す言葉で、「ひらひら」「よちよち」などがその仲間です。中には「がさがさ」のように、擬音語・擬態語どちらでも使う言葉もあります。

・林の木々がガサガサとゆれていた。
・木の表面は、がさがさしている。

擬音語・擬態語の違いを見つけるときは「～する」とつなげて使えるものが擬態語、と覚えていていいですよ。

◆比ゆ

違うものに例えて使う言葉です。「まるで～のように」「～のような」という使い方をします。

◆色を表す言葉

普通に「赤い」というような言い方でも使いますし、「真っ赤に」と色の様子を詳しくして使うこともあります。また、ものの色に例えた色の表わし方「空色」「にじ色」などもあります。

「様子を表す言葉」上手にを使っていきましょう。

言 様子を表す言葉

名前

こたえと説明

【1】（　）の中にぴったりの言葉を［　　］から選んで記号を書きましょう。

① ひらひら（エ）
② みしみし（イ）
③ よたよた（ア）
④ よちよち（ウ）
⑤ さらさら（オ）

ア おじいさんが歩く
イ ゆかがきしむ
ウ 赤ちゃんが歩く
エ 花びらがまう
オ 小川が流れる

「ひらひら」は空中をただようような様子を表します。
「みしみし」は重みなどで力がかかった時にでる音です。
「よたよた」「よちよち」はどちらも歩く様子を表しますが，「よちよち」は赤ちゃんにしか使わないですね。
「さらさら」はなめらかな様子を表す言葉です。

【2】（　　）に入る言葉を、文章に合うように［　　］から選んで書きましょう。

① 今日は、朝から小雨が（しとしと）とふっていました。学校に着いたとき（真っ青な）青空が広がり、西の空には（色あざやかな）な虹があらわれました。

色あざやかな　しとしと　真っ赤な　真っ青な　ざあざあ

雨のふり方を表す言葉は「ざあざあ」「しとしと」「ぽつぽつ」などがあります。ここでは小雨なので「しとしと」がいいですね。
青空の上に入る言葉は色を表す言葉を入れます。真っ赤な青空はおかしい表現ですね。
虹はたくさんの色ですから，「色あざやか」の表現がよいでしょう。

② 山の頂上から見下ろすと道行く人が（ありのように）小さく見えました。自分がまるで、（大男のように）思えました。

大男のように　魚のように　ありのように　母のように

ここは、ひゆ（たとえ）の表現が使われています。山から見下ろしたら人がどんな大きさに見えるでしょうか。
比ゆは、いろんなところで使われる分かりやすい表現ですから、みんなが知っていることで例えることが大切です。

③ ある日のことでした。子だぬきは、（シーン）と静まり返った森の中で母さんだぬきの帰りを待ちました。（カサカサ）と葉っぱがこすれる音がするたびに、子だぬきの心臓は（ドッキン）と大きな音をひびかせるのでした。……

ペタペタ　カサカサ　バタン　ドッキン　シーン　ワーワー

音を表す表現（擬音語）を使った文章は，その場のふんいきがくわしく分かります。心細い子だぬきの心の中がわかるように，音の表現を上手に使いたいですね。

言語

文の組み立て

名前

文章には、骨組みになる部分があります。その骨組みになる部分を「主語」「述語」といいます。

主語

「何を」「何が」にあたる部分です。

述語

① 「どうする」動きを表す言葉

② 「どんなだ」様子を表す言葉

③ 「何だ」　ものなどを表す言葉

例えば

妹は　⇦ 主語

かわいい。　⇦ 述語

ぼくの　犬が　⇦ 主語

ほえる　⇦ 述語

やってみよう

☆　次の文から主語と述語をみつけましょう。

ぼくは　思いっきり　なげた。

主語 [　　]　述語 [　　]

きれいな　さくらが　さいている。

主語 [　　]　述語 [　　]

あれは　姉の　赤い　自転車だ。

主語 [　　]　述語 [　　]

主語は、文のはじめ
述語は、文の終わり
にくることが多いよ

言語

文の組み立て

名前

文章には、骨組みになる部分があります。その骨組みになる部分を「主語」「述語」といいます。

主語

「何を」「何が」にあたる部分です。

述語

① 「どうする」動きを表す言葉

② 「どんなだ」様子を表す言葉

③ 「何だ」　ものなどを表す言葉

例えば

妹は　かわいい。

主語　述語

ぼくの　犬が　ほえる

主語　述語

やってみよう

☆ 次の文から主語と述語をみつけましょう。

ぼくは　思いっきり　なげた。

主語：ぼくは　述語：なげた

きれいな　さくらが　さいている。

主語：さくらが　述語：さいている

あれは　姉の　赤い　自転車だ。

主語：あれは　述語：自転車だ

主語は、文のはじめ
述語は、文の終わり
にくることが多いよ

言語

文の組み立て

名前

文には、主語と述語だけでなく、主語や述語などをくわしく説明するものもあります。そのようなものを修飾語といいます。

例えば、左の文で

あれは　姉の　赤い　自転車だ。

主語

述語

主語は「あれは」、述語は「自転車だ」になりますね。

主語と述語をのぞいた「姉の」と「赤い」が「修飾語」です。

姉の　は　自転車だ　をくわしく説明しています。

赤い　は　自転車だ　をくわしく説明しています。

姉の　も　赤い　も　自転車だ　をくわしくしています。

修飾語って、ものの色や形、ようすなどいろいろありそうだね。

やってみよう

☆「さいている」をくわしくしている言葉はどれでしょう。

きれいな　さくらが　さいている。

☆「大きい」をくわしくしている言葉はどれでしょう。

ぼくの　犬は　大きい。

☆何をくわしく説明しているのかな。□でかこんだ修飾語は、何をくわしく説明しているのでしょうか。

おかあさんが　楽しそうに　料理をつくる。

楽しそうに

豆知識

文章…いくつかの文からできている。
文　…句点（。）で区切られたもの。
文節…言葉としての意味がわかるように、短くわけたもの。
単語…文節を意味やはたらきがなくならないように区切ったもの。

言語

文の組み立て

名前

文には、主語と述語だけでなく、主語や述語などをくわしく説明するものもあります。そのようなものを修飾語といいます。

例えば、左の文で

あれは　姉の　赤い　自転車だ。

主語

述語

主語は「あれは」、述語は「自転車だ」になりますね。

主語と述語をのぞいた「姉の」と「赤い」が「修飾語」です。

姉の　は　自転車だ　をくわしく説明しています。

赤い　は　自転車だ　をくわしく説明しています。

姉の　も　赤い　も　自転車だ　をくわしくしています。

修飾語って、ものの色や形、ようすなどいろいろありそうだね。

やってみよう

☆「さくら」をくわしくしている言葉はどれでしょう。

きれいな　さくらが　さいている。

きれいな

☆「大きい」をくわしくしている言葉はどれでしょう。

ぼくの　犬は　大きい。

ぼくの

☆何をくわしく説明しているのかな。□でかこんだ修飾語は、何をくわしく説明しているのでしょうか。

おかあさんが　楽しそうに　料理をつくる。

楽しそうに

つくる

豆知識

文章…いくつかの文からできている。
文　…句点（。）で区切られたもの。
文節…言葉としての意味がわかるように、短くわけたもの。
単語…文節を意味やはたらきがなくならないように区切ったもの。

言語

敬語の使い方

名前

○　次のうち、敬語を正しく使っているものはどの文章でしょうか。正しいものをすべて選んで（　）に○を書きましょう。

（　）先生が明日の連絡を言った。

（　）今日、夜七時にうかがいます。

（　）校長先生が教えてくれた。

（　）友達の太郎君が、おっしゃった。

（　）病院の先生が、おっしゃった。

（　）神社で、お参りする。

（　）これから、そちらに参ります。

（　）妹が、お出かけになった。

（　）校長先生が、お帰りになられた。

（　）妹が、お休みになった。

（　）おごちそうさまでした。

（　）先生、次の勉強はなに。

（　）先生、このケーキ食べる。
　※先生にたずねるとき。

（　）今日は、いい天気だね。
　※年上の人に

○　次の文で、┃の部分の言葉を敬語に書きかえましょう。

①　校長先生が、もうすぐ来る┃。

②　市長さんが、○○と言った┃。

③　おばさんから、おみやげをもらった┃。

④　先生は、職員室にいます┃。

⑤　明日は、先生の家に行く┃ことになっている。

言語

敬語の使い方

名前　答え

○　次のうち、敬語を正しく使っているものはどの文章でしょうか。正しいものをすべて選んで（　）に○を書きましょう。

（　）先生が明日の連絡を言った。

（○）今日、夜七時にうかがいます。

（　）校長先生が教えてくれた。

（　）友達の太郎君が、おっしゃった。

（○）病院の先生が、おっしゃった。

（○）神社に、お参りする。

（○）これから、そちらに参ります。

（　）妹が、お出かけになった。

（　）校長先生が、お帰りになられた。

（　）妹が、お休みになった。

（　）おごちそうさまでした。

（　）先生、次の勉強はなに。

（　）先生、このケーキ食べる。
　※先生にたずねるとき。

（　）今日は、いい天気だね。
　※年上の人に

○　次の文で、┃の部分の言葉を敬語に書きかえましょう。

①　校長先生が、もうすぐ来る┃。

いらっしゃる

②　市長さんが、○○と言った┃。

おっしゃった

③　おばさんから、おみやげをもらった┃。

いただいた

④　先生は、職員室にいます┃。

いらっしゃいます

⑤　明日は、先生の家に行く┃ことになっている。

うかがう

言語

覚えておきたい言葉①

名前

○「詩」に関係のある言葉

用語	意味	例
連	文章でいう段落のようなまとまりをいう。連と連の間は一行空いている。	連 ※一行空き 連
倒置法（とうちほう）	文章の中の言葉の順番を入れかえて強める方法。	※ぼくは走った、だれよりも早く。
反復法	同じ言葉や表現をくり返し使うことで、リズムを整えたり強めたりする方法。	※降った降った雨が降った。 降った降った雪が降った。
対句法	関係があり、組み立て方が同じまたは似ている言葉や文などを並べてリズムを整え、変化をつける方法。	※ぼくが　笑うと お花も　笑う。 ぼくが　おこると お花も　おこる。
比喩法（ひゆほう）	あるものを他のものにたとえて表現する方法。	※まるでヒョウのように走る。
擬人法（ぎじんほう）	人間ではないものを人間のように見て、たとえる方法。比喩法の仲間。	※太陽は、にこにこ笑って、ぼくに話しかけた。
体言止め	行の終わりを名詞で止めて印象（感じ方）を強める方法。	※いつもしかられてばかりのぼく。
省略法	言葉を省略し、余韻（よいん）をもたせる方法。	※お母さんは、泣いた。 ぼくも、…。

言語

覚えておきたい言葉②

名　前

○読み取りに関係のある言葉

①形式段落…文のまとまり。一字落ちている。

②意味段落…形式段落を、書かれている内容でいくつかのまとまりに分けた段落の集まり。（物語の場面や説明文の問いかけ、説明、まとめなど。）

③あらすじ…物語の大体の内容。５Ｗ１Ｈ（だれが、何を、いつ、どこで、どうした、どのように）

④要点　…段落の中で、筆者が述べようとしていることの主な内容。

⑤要約　…文章全体のあらましをまとめること。物語のあらすじに当たる。

⑥要旨（し）　…筆者が文章全体で述べている考えの中心。

⑦接続語　…文をつなぐ言葉。つなぎ言葉。

⑧指示語　…これ、それ、あれ、どれなどのように、文章のどこかの言葉を指している言葉。こそあど言葉。

⑨序論　…説明文で、話題や問いかけを示している文章のまとまり。

⑩本論　…説明文で、話題や問いかけについて説明している文章のまとまり。

⑪結論　…説明文で、全体をまとめている文章のまとまり。

⑫クライマックス…物語の山場。中心人物の心情が大きく変わるところ。

⑬文末表現…文章の最後の部分。～だろうか。～にちがいない。～だ。など。

言語

文の組み立て

名前

チャレンジ

☆　複雑な文にチャレンジしよう。

主語と述語が二組あるよ。
主語と述語の組をつくってみよう。
さて、できるかな。

太郎は　一年生で、ぼくは　二年生です。

○　前の文に、主語は二つあります。探してみましょう。

この文は、「太郎は　一年生です。」と「ぼくは　二年生です。」の対等な二つの文が、重なって一つの文になったものです。こんな文を「重文」といいます。

☆　次の文の主語と述語の組をみつけましょう。

花子は　赤組で、私は　白組です。

主語

述語

言語

文の組み立て

名前

チャレンジ

☆　複雑な文にチャレンジしよう。

主語と述語が二組あるよ。
主語と述語の組をつくってみよう。
さて、できるかな。

太郎は　一年生で、ぼくは　二年生です。

○　前の文に、主語は二つあります。探してみましょう。

太郎は

ぼくは

この文は、「太郎は　一年生です。」と「ぼくは　二年生です。」の対等な二つの文が、重なって一つの文になったものです。こんな文を「重文」といいます。

☆　次の文の主語と述語の組をみつけましょう。

花子は　赤組で、私は　白組です。

主語

花子は

私は

⇩

⇩

述語

赤組で

白組で

言語

慣用句（1）

名前

慣用句（かんようく）とは

二つ以上の言葉が合わさって特別な意味になる言葉のことを「慣用句（かんようく）」と言います。
慣用句はたくさんあって、それぞれの意味を知っておくことで、表現の幅がひろがりますよ。

慣用句には体の部分を使ったものが、数多くあります。次の□の中にあてはまる字を□からえらんで書き入れましょう。

① □が軽い
＊言ってはいけないことを言ってしまうこと

② □から火が出る
＊頭を強くぶつけたときなどに受ける感覚のこと

③ □をなでおろす
＊安心しほっとするようす。

④ □がぼうになる
＊歩き続けたりして、足がひどくつかれること

⑤ □の荷がおりる
＊責任を果たして楽な気分になること

⑥ □が切れる
＊頭の回転が速く、てきぱきと事を行うこと

⑦ □をつっこむ
＊仲間に加わったり、その事に関係すること

目　口　肩（かた）　頭　首　足　手　耳　胸（むね）

体の部分を使った慣用句はまだまだあるよ。どれくらい分かるかな。（顔編）

頭
頭がいたい
頭がかたい
頭が下がる
頭に入れる
頭に血がのぼる
頭をかかえる
頭を上げる
頭を冷やす
頭に来る

鼻
鼻が利く
鼻が曲がる
鼻息があらい
鼻が高い
鼻を持たす

目
目が利く
目がさえる
目を落とす
目頭を押さえる
目が肥える
目をうたがう
目をおおう

耳
耳が痛い
耳をうたがう
耳をすます
耳がはやい
耳を貸す
聞き耳をたてる

口
口がうまい
口が軽い
口をすべらせる
口が重い
口が肥える
口を出す

言語

慣用句（1）

名前

こたえと説明

☆慣用句はその字が持つ本来の意味とは違った、特別の意味を表すものです。意味を知り、日記を書くときやスピーチをするときなど、進んで使ってみましょうね。

慣用句には体の部分を使ったものが、数多くあります。次の□の中にあてはまる字を□からえらんで書き入れましょう。

① 口が軽い
＊言ってはいけないことを言ってしまうこと

② 目から火が出る
＊頭を強くぶつけたときなどに受ける感覚のこと

③ 胸をなでおろす
＊安心しほっとするようす。

④ 足がぼうになる
＊歩き続けたりして、足がひどくつかれること

⑤ 肩の荷がおりる
＊責任を果たして楽な気分になること

⑥ 頭が切れる
＊頭の回転が速く、てきぱきと事を行うこと

⑦ 首をつっこむ
＊仲間に加わったり、その事に関係すること

目　口　肩（かた）　頭　首　足　手　耳　胸（むね）

手
手が空く　手が出ない
手がとどく　手にあまる
手に負えない　手につかない
手を打つ　手をかえす
手に汗にぎる

足
足が出る　足に任せる
足を洗う　足をすくう
足を運ぶ　足を引っ張る

肩
肩を怒らす　肩を貸す
肩をすくめる　肩をすぼめる
肩を並べる　肩を持つ

胸
胸が痛む　胸がおどる
胸がつかえる　胸におさめる
胸を打つ　胸をこがす

腹
腹が黒い　腹が据わる
腹が立つ　腹を決める

腰
腰がある　腰が重い
腰を落ち着ける　腰を据える
腰を抜かす　腰を落ち着ける

体の部分を使った慣用句はまだまだあるよ。どれくらい分かるかな。（体編）

言語

慣用句（2）

名前

慣用句（かんようく）とは

二つ以上の言葉が合わさって特別な意味になる言葉のことを「慣用句（かんようく）」と言います。慣用句はたくさんあって、それぞれの意味を知っておくことで、表現の幅がひろがりますよ。

【1】①～⑤の慣用句はどんな意味でしょう。（　）の中に記号を書きましょう。

① うり二つ（　）
② 馬が合う（　）
③ 顔が広い（　）
④ 油を売る（　）
⑤ 息をのむ（　）

ア　仕事の途中などで、むだ話をしてなまけること
イ　お互いの性格や話が合うこと
ウ　顔かたちが見分けのつかないほどよく似ていること
エ　知り合いが多いこと
オ　おどろいて、息を止めること

【2】次の文に前の問題の慣用句をあてはめます。【1】の①～⑤の番号を（　）に書きましょう。

◆ 会えばケンカばかりのぼくとケンちゃんだけど、ゲームのことでは（　）。

◆ 富士山の頂上から見た景色は、（　）ほど美しかった。

◆ うちのおばあちゃんとお母さんは（　）で、口ぐせも同じだ。

【3】次の（　）に数字が入り、慣用句として使われます。あてはまる漢数字を書きましょう。

◆ （　）か（　）か
＊運を天にまかせて思い切ってやるときに使う言葉

◆ （　）も承知
＊言われるまでもなく分かっているときに使う言葉

◆ （　）びょうしそろった
＊すべての条件がそろうこと

◆ （　）巻の終わり
＊物事の決着がついて、もう終わりになってしまうこと

慣用句では本来の言葉の意味が変わったり、特定の組み合わせで言葉が使われたりします。では、慣用句を知っておくよさは何でしょう。次の例を見てください。

＊ 昨日のサガン鳥栖の試合は最後まで緊張する展開でした。

＊ 昨日のサガン鳥栖の試合は最後まで手に汗にぎる展開でした。

このように、慣用句を使うことで、**自分が伝えたい気持ちや様子を簡潔に表現する**ことができます。

動物や植物が入った慣用句

・馬が合う　・うり二つ
・きつねにつままれる　・根にもつ
・犬の遠ぼえ　・うどの大木（たいぼく）
・虫の居所が悪い　・根も葉もない　など

数字を使った慣用句

・一か八か　・一事が万事
・一巻の終わり　・一糸乱れず
・二足のわらじ　・二の句をつげない
・三拍子そろう　・十指に余る
・百も承知　などなど

たくさんある慣用句ですが、少しずつ覚えていって、どんどん使っていきましょうね。

言語

慣用句（2）

名前

こたえと説明

【1】①～⑤の慣用句はどんな意味でしょう。（　）の中に記号を書きましょう。

① うり二つ（ウ）
② 馬が合う（イ）
③ 顔が広い（エ）
④ 油を売る（ア）
⑤ 息をのむ（オ）

ア　仕事の途中などで、むだ話をしてなまけること
イ　お互いの性格や話が合うこと
ウ　顔かたちが見分けのつかないほどよく似ていること
エ　知り合いが多いこと
オ　おどろいて、息を止めること

【2】次の文に前の問題の慣用句をあてはめます。【1】の①～⑤の番号を（　）に書きましょう。

◆ 会えばケンカばかりのぼくとケンちゃんだけど、ゲームのことでは（②）。

◆ 富士山の頂上から見た景色は、（⑤）ほど美しかった。

◆ うちのおばあちゃんとお母さんは（①）で、口ぐせも同じだ。

【3】次の（　）に数字が入り、慣用句として使われます。あてはまる漢数字を書きましょう。

◆ （一）か（八）か
＊運を天にまかせて思い切ってやるときに使う言葉

◆ （百）も承知
＊言われるまでもなく分かっているときに使う言葉

◆ （三）びょうしそろった
＊すべての条件がそろうこと

◆ （一）巻の終わり
＊物事の決着がついて、もう終わりになってしまうこと

【1】慣用句にはその成り立ちから意味が出来上がっています。どんな成り立ちか見てみましょう。

うり二つ
うりをたて二つに割ると、二つのうりが全く同じ形をしていることから

馬が合う
馬とその乗り手の呼吸がぴったりあうという意味から

顔が広い
多くの人に顔を知られていたり、知っていたりすることから

油を売る
江戸時代、油売りが客の器に油を移すのに時間がかかったことから

息をのむ
びっくりしたり、感動したりして呼吸を止めてしまうことから

【2】このような問題は、文の流れをつかまないと間違えてしまいますね。慣用句はそのものの意味をしっかりとらえて答えましょうね。

【3】意味を考えながら答える必要がある問題でしたが、その成り立ちも調べてみるといいですね。

やってみよう

【3】にある慣用句を使って短文を作ってみよう。

国語

ことわざの学習　1

年

名前

1　①から④の意味のことわざを、［　　］から選び、□に書きましょう。

① つらくてもしんぼうして続ければ、成功する。　□

② 人生では、成功も失敗もある。失敗してもあきらめずに努力せよ。　□

③ 原因をつくらなければ、結果は生じない。　□

④ あわてず、確実な方法をとるほうがよい。　□

［　負けるが勝ち　まかぬ種は生えぬ　七転び八起き　石の上にも三年　急がば回れ　つめに火をともす　］

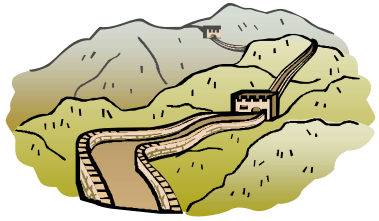
2　（　）の中に漢数字を書き入れて、ことわざを完成しましょう。

① （　　）里の道も（　　）歩より

② （　　）寸の虫にも（　　）分の魂

③ （　　）聞は（　　）見にしかず

④ （　　）兎追う者は、（　　）兎も得ず



3　①から④までのことわざと、よく似た意味に使われていることわざをA～Dの中から選び、線で結びましょう。

① 弘法にも筆の誤り　・　　・ A　ぬかにくぎ

② 石橋をたたいて渡る　・　　・ B　三つ子の魂百まで

③ すずめ百まで踊り忘れず　・　　・ C　さるも木から落ちる

④ のれんに腕押し　・　　・ D　念には念を入れよ

国語

ことわざの学習　1
解　答

年

名前

1

①から④の意味のことわざを、［　　］から選び、［　　］に書きましょう。

① つらくてもしんぼうして続ければ、成功する。
［石の上にも三年］

② 人生では、成功も失敗もある。失敗してもあきらめずに努力せよ。
［七転び八起き］

③ 原因をつくらなければ、結果は生じない。
［まかぬ種は生えぬ］

④ あわてず、確実な方法をとるほうがよい。
［急がば回れ］

［負けるが勝ち　まかぬ種は生えぬ　七転び八起き　石の上にも三年　急がば回れ　つめに火をともす］

2

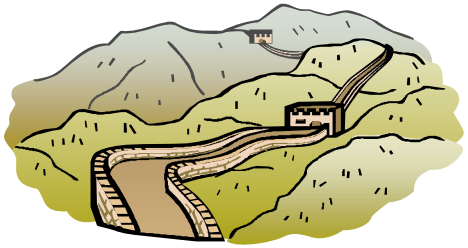
（　　）の中に漢数字を書き入れて、ことわざを完成しましょう。

① （千）里の道も（一）歩より

② （一）寸の虫にも（五）分の魂

③ （百）聞は（一）見にしかず

④ （二）兎追う者は、（一）兎も得ず



3

①から④までのことわざと、よく似た意味に使われていることわざをA～Dの中から選び、線で結びましょう。

① 弘法にも筆の誤り　　A　三つ子の魂百まで

② 石橋をたたいて渡る　　B　ぬかにくぎ

③ すずめ百まで踊り忘れず　　C　さるも木から落ちる

④ のれんに腕押し　　D　念には念を入れよ

国語

ことわざの学習　1

解　説

年

名前

1

ことわざの意味を理解しましょう。

① 石の上にも三年……つらくてもしんぼうして続ければ、成功する
・三年すれば石も暖まることから、しんぼうして続ければ成功するという意味を表した。

② 七転び八起き……人生では、成功も失敗もある。失敗してもあきらめずに努力せよ。
・七度転んでも、八度起き上がることから、あきらめないことの大切さを教えている。

③ まかぬ種は生えぬ……原因をつくらなければ、結果は生じない。
・種をまかなければ何も生えないことから、何もしなければよい結果は生まれないという意味を表している。

④ 急がば回れ……あわてず、確実な方法をとるほうがよい。
・危ない近道よりも、安全な道を回る方がかえって確実に着くことから、急いでいるときこそ、確実な方法をとるほうがよいことを表している。

ことわざは、短い表現ですが、味わい深いものがあります。
意味がよく分からなかったことわざについては、ことわざ辞典で調べ、確かめてみましょう。

2

漢数字を使ったことわざに親しみましょう。

① 千里の道も一歩より
・遠い道も一歩から始まる。小さな一歩を積み重ねよう。

② 一寸の虫にも五分の魂
・どんなに小さく弱い者も、あなどってはいけない。

③ 百聞は一見にしかず
・話を何度聞くよりも、自分の目で見た方が分かる。

④ 二兎追う者は、一兎も得ず
・同時に二つを得ようとしても、結局できない。

※　漢数字を使ったことわざは、他にもたくさんあります。調べてみましょう。

仏の顔も三度
一事が万事
一矢報いる

3

ことわざの意味を考え、同じような意味をもつことわざを見つけましょう。

① 「弘法にも筆の誤り」と「さるも木から落ちる」
・どんなに上手でも、ときには失敗することがある。

② 「石橋をたたいて渡る」と「念には念を入れよ」
・用心した上にさらに用心せよ。

③ 「すずめ百まで踊り忘れず」と「三つ子の魂百まで」
・小さいころから身につけた性質は、改めにくい。

④ 「のれんに腕押し」と「ぬかにくぎ」
・努力しても、手ごたえがない。

※　同じような意味を持つことわざが他にもないか調べてみましょう。

虻蜂取らず
二兎追う者は、一兎も得ず

国語

ことわざの学習　2

年

名前

1　①から④の意味のことわざを、［　　］から選び、□に書きましょう。

① よいと思ったことは、ためらうことなく実行すべきという意味。　□

② すらすらと話すことのたとえ。　□

③ 遠回しすぎて、思うようにならないことのたとえ。　□

④ 役に立つ物を持っているのに、しまいこんで使わないことのたとえ。　□

［急がば回れ　二階から目薬　立て板に水　石の上にも三年　善は急げ　宝の持ちぐされ］

2　線を引いた言葉の対になる言葉を［　　］から選び、（　　）の中に書き入れて、ことわざを完成しましょう。

① 多勢に（　　）（相手が多人数なのに対して少人数なので、勝ち目がないこと）

② 負けるが（　　）（しいて争わず、勝ちをゆずるのが、結局は勝利をもたらすということ）

③ 急がば（　　）（急ぐときは、危ない近道を通るよりも、遠くても安全で確実な道をとったほうが、結局は、早く到着すること）

④ 公然の（　　）（かくしているはずが、広く世間に知れ渡ってしまっていること）

［ひみつ　少勢　勝ち　無勢　注意　回れ］

3　①から④までのことわざと、よく似た意味に使われていることわざをA～Dの中から選び、線で結びましょう。

① 虻蜂とらず　・　・　A　弱り目にたたり目

② 鬼に金棒　・　・　B　柔よく剛を制す

③ 泣きっ面に蜂　・　・　C　虎に翼

④ 柳に雪折れなし　・　・　D　二兎追う者は、一兎も得ず

国語

ことわざの学習　2
解答と解説

年

名前

1　①から④の意味のことわざを、［　　］から選び、□に書きましょう。

① よいと思ったことは、ためらうことなく実行すべきという意味。
　善は急げ

② すらすらと話すことのたとえ。
　立て板に水

③ 遠回しすぎて、思うようにならないことのたとえ。
　二階から目薬

④ 役に立つ物を持っているのに、しまいこんで使わないことのたとえ。
　宝の持ちぐされ

［急がば回れ　二階から目薬　立て板に水　石の上にも三年　善は急げ　宝の持ちぐされ］

2　線を引いた言葉の対になる言葉を［　　］から選び、（　　）の中に書き入れて、ことわざを

① 多勢に（ **無勢** ）（相手が多人数なのに対して少人数なので、勝ち目がないこと）

② 負けるが（ **勝ち** ）（しいて争わず、勝ちをゆずるのが、結局は勝利をもたらすということ。）

③ 急がば（ **回れ** ）（急ぐときは、危ない近道を通るよりも、遠くても安全で確実な道をとったほうが、結局は、早く到着すること）

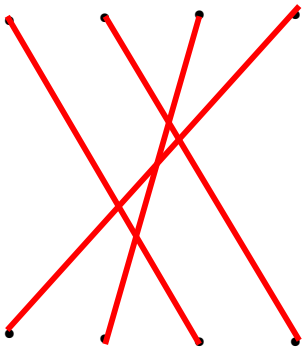
④ 公然の（ **ひみつ** ）（かくしているいるはずが、広く世間に知れ渡ってしまっていること）

［ひみつ　少勢　勝ち　無勢　注意　回れ］

3　①から⑤までのことわざと、よく似た意味に使われていることわざをA～Dの中から選び、線で結びましょう。

① 虻蜂とらず
② 鬼に金棒
③ 泣きっ面に蜂
④ 柳に雪折れなし

A　弱り目にたたり目
B　柔よく剛を制す
C　虎に翼
D　二兎追う者は、一兎も得ず



国語

ことわざの学習　2

解説

年

名前

1

ことわざの意味を理解しましょう。

① 善(ぜん)は急げ・・・よいと思ったことは、ためらうことなく実行した方がよいこと。
・よいと思ったことは、すぐに実行すべきだという意味。
同じような意味のことわざに、「思い立ったが吉日」がある。

② 立て板に水・・・・すらすらと話すことのたとえ。
・立てた板に水を流すと速く流れることから、すらすらと話すことにたとえた。

③ 二階から目薬・・・・遠回しすぎて、思うようにならないことのたとえ。
・二階から目薬をさすことはむずかしいことから、思うようにならないことをたとえた。

④ 宝の持ちぐされ・・・役に立つ物をもっているのに、しまいこんで使わないこと。
・せっかくよいものをもっているのに、役立てないことをたとえた。

2

ことわざの意味を考え、ことわざを完成させましょう。

① 多勢(たせい)に無勢(ぶせい)
・相手が多人数なのに対して少人数なので、勝ち目がないこと。
「無勢」は「人数の少ないこと」という意味。

② 負けるが勝ち
・しいて争わず、勝ちをゆずるのが、結局は勝利をもたらすということ。
同じような意味をもつことわざに「逃げるが勝ち」「負けて勝つ」「負けるは勝ち」がある。

③ 急がば回れ
・遠くても安全で確実な道をとったほうが、結局は早いということ。
同じような意味をもつことわざに「近道は遠道」「急（せ）いては事をし損じる」がある。

④ 公然(こうぜん)の秘密(ひみつ)
・かくしているつもりが、広く世間に知れ渡ってしまっていること。

3

ことわざの意味を考え、同じような意味をもつことわざを見つけましょう。

① 「虻蜂(あぶはち)とらず」と「二兎(にと)追う者は、一兎(いっと)も得ず」
・同時に二つを得ようとしても、結局できないことのたとえ。

② 「鬼(おに)に金棒(かなぼう)」と「虎(とら)に翼(つばさ)」
・強い者に、さらに強さを加えることのたとえ。

③ 「泣きっ面に蜂(はち)」と「弱り目にたたり目」
・ついていないことが重なることのたとえ。

④ 「柳(やなぎ)に雪折れなし」と「柔(じゅう)よく剛(ごう)を制す」
・やわらかくしなやかなものが、かえって強いものをおさえること。

音読

はっきりとした声で、
すらすらと読みましょう

年

名前

発音・発声 1

発音や発声の練習になる早口言葉です。
はっきりとした声で、なめらかに読むことができるように、音読の練習をしましょう。

あめんぼの歌

北原　白秋

あめんぼあかいなあいうえお
うきもにこえびもおよいでる
かきのきくりのきかきくけこ
きつつきこつこつかれけやき
ささげにすをかけさしすせそ
そのうをあさせでさしました
たちましょらっぱでたちつてと
とてとてたったととびたった
なめくじのろのろなにぬねの
なんどにぬめってなにねばる
はとぽっぽほろほろはひふへほ
ひなたのおへやにゃふえをふく
まいまいねじまきまみむめも
うめのみおちてもみもしまい
やきぐりゆでぐりやいゆえよ
やまだにひのつくよいのいえ
らいちょうさむかろらりるれろ
れんげがさいたらるりのとり
わいわいわっしょいわゐうゑを
うえきやいどがえおまつりだ

(水馬(あめんぼ)　赤いな　あいうえお)
(浮藻(うきも)に　小蝦(こえび)も　泳いでる)
(柿(かき)の木　栗(くり)の木　かきくけこ)
(啄木鳥(きつつき)　こつこつ　枯(か)れ欅(けやき))
(大角豆(ささげ)に　酢(す)をかけ　さしすせそ)
(その魚(うお)　浅瀬(あさせ)で　刺(さ)しました)
(立ちましょ　喇叭(らっぱ)で　たちつてと)
(トテトテ　タッタと　飛び立った)
(蛞蝓(なめくじ)　のろのろ　なにぬねの)
(納戸(なんど)に　ぬめって　なにねばる)
(鳩(はと)ポッポ　ほろほろ　はひふへほ)
(日向(ひなた)の　お部屋(へや)にゃ　笛(ふえ)を吹(ふ)く)
(蝸牛(まいまい)　ネジ巻(まき)　まみむめも)
(梅(うめ)の実　落ちても　見もしまい)
(焼栗(やきぐり)　ゆで栗　やいゆえよ)
(山田に　灯(ひ)のつく　よいの家)
(雷鳥(らいちょう)　寒かろ　らりるれろ)
(蓮花(れんげ)が　咲(さ)いたら　瑠璃(るり)の鳥)
(わいわい　わっしょい　わゐうゑを)
(植木屋(うえきや)　井戸換(いどがえ)へ　お祭りだ)

	よい姿勢	よく聞こえる	すらすらと読める	はっきりした発音
私の評価　（◎・○・△）				
先生の評価（◎・○・△）				

（◎　とてもよい　　○　よい　　△　もう少し）

読んだ回数（◯で囲む）	
11	1
12	2
13	3
14	4
15	5
16	6
17	7
18	8
19	9
20	10

音読

口の形に気をつけて、
はっきりと読みましょう

年

名前

発音・発声2

発音と発声の練習です。
はっきりとした声で、なめらかに読むことができるように、音読の練習をしましょう。

あえいうえおあお
かけきくけこかこ
させしすせそさそ
たてちつてとたと
なねにぬねのなの
はへひふへほはほ
まめみむめもまも
やえいゆえよやよ
られりるれろらろ
わゑゐうゑをわを（えい）
がげぎぐげごがご
ざぜじずぜぞざぞ
だでぢづでどだど
ばべびぶべぼばぼ
ぱぺぴぷぺぽぱぽ

きゃけき きゅけ きゃきょ
しゃせし しゅせ しゃしょ
ちゃてち ちゅて ちゃちょ
にゃねに にゅね にゃにょ
ひゃへひ ひゅへ ひゃひょ
みゃめみ みゅめ みゃみょ
りゃれり りゅれ りゃりょ
ぎゃげぎ ぎゅげ ぎゃぎょ
じゃぜじ じゅぜ じゃじょ
びゃべび びゅべ びゃびょ
ぴゃぺぴ ぴゅぺ ぴゃぴょ

	よい姿勢	よく聞こえる	すらすらと読める	はっきりした発音
私の評価　（◎・○・△）				
先生の評価（◎・○・△）				

（◎　とてもよい　　○　よい　　△　もう少し）

読んだ回数（○で囲む）	
11	1
12	2
13	3
14	4
15	5
16	6
17	7
18	8
19	9
20	10

音読

発音と発声練習１・２プリントの学習の手引き

年

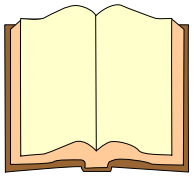
名前

音読の基礎基本の手引き

音読の効果

音読をすると、言葉や文章の読み取りが、速く正確にできるようになります。

音読は、言葉や文章を目で見て、どう読むかを考えながら、声に出して読むことです。また、音読したことを自分の耳で聞いて、内容を確かめることもできます。音読では、目、口、耳や頭を使って、効果的に読む力を高めることができ、言葉や文章の読み取りが、速く正確にできるようになります。



音読の目標

① **正しく**読めるようになる。
② **はっきり**読めるようになる。
③ **すらすらと**読めるようになる。

言葉の意味や内容が伝わるように、**正しく**、**はっきり**、**すらすらと**読みましょう。

音読の基礎・基本　（姿勢・発声・発音）

姿勢・発声・発音は、音読の基礎・基本です。

音読する前に気をつけたいこと

① かたの力をぬきましょう。
② 背すじは伸ばしましょう。
③ 息は、おなかに入れましょう。

発音と発声の練習をしましょう。

① はっきりとした声で、なめらかに読むことができるように、音読の練習をしましょう。
・**評価表の目標を達成**することを意識して読みましょう。
・ア段からオ段を、**口の形を意識**しながら発音しましょう。
　あめんぼ　あかいな　あいうえお・・・
・少しはなれた人にも**聞こえる声で**読みましょう。
・読んだ**回数を記録**しましょう。

② よく読めるようになったら、評価表に記録したり先生に評価してもらったりして、自分の**読み方を確認**しましょう。

音読

俳句のリズムを感じ取りながら音読や暗唱をしましょう

年

名前

俳句１（春をよんだ俳句）　**俳句**（はいく）とは五・七・五の十七音から成るものです。季節や風情、歌に込めた思いなどを思い浮かべたり、俳句がもつリズムを感じ取ったりしながら読みましょう。

雪とけて　村いっぱいの　子どもかな　（小林一茶）

冬の長い間ずっと家の中にいた子どもたちが、春を迎え、雪どけとともに、待ちかねていたかのように外へ飛び出した。春の明るい日差しを浴びて、村の中はどこも子どもたちでいっぱいだ。

梅一輪（むめいちりん）　一輪ほどの　あたたかさ（服部嵐雪（はっとりらんせつ））

早春、庭の梅が一輪咲いた、その一輪に、わずかながら暖かくなってきていると、春の訪れを感じる。

赤い椿（つばき）　白い椿と　落ちにけり　（河東碧梧桐（かわひがしへきごとう））

紅白の二本の椿（つばき）の木から、ぽとり、ぽとりと落ちた椿の花。それぞれの木を囲むようにして、地面に落ちている。

古池（ふるいけ）や　蛙（かわず）飛びこむ　水の音　（松尾芭蕉（まつおばしょう））

古池にいると、一匹のかえるが池に飛びこんだ。あたりはひっそり静まりかえっているので、その小さい水音さえ、聞き取れる。それほど、深い静けさがある。

菜（な）の花や　月は東に　日は西に　（与謝蕪村（よさぶそん））

辺り一面に咲く菜の花畑に、一日が暮れてゆこうとしている。東の地平には、月が上り始め、西の空には太陽が沈もうとしている。

読んだ回数（○で囲む）	
11	1
12	2
13	3
14	4
15	5
16	6
17	7
18	8
19	9
20	10

	よい姿勢	すらすら読む	俳句の暗唱	意味が言える
私の評価（◎・○・△）				
先生の評価（◎・○・△）				

（◎　とてもよい　　○　よい　　△　もう少し）

音読

俳句のリズムを感じ取りながら音読や暗唱をしましょう

年

名前

俳句２（夏をよんだ俳句）

俳句（はいく）とは五・七・五の十七音から成るものです。季節や風情、歌に込めた思いなどを思い浮かべたり、俳句がもつリズムを感じ取ったりしながら読みましょう。

五月雨（さみだれ）を　集めて早し　最上川（もがみがわ）　（松尾芭蕉）

毎日降り続く五月雨の雨水は、最上川を増水させ、大きな音を立て、勢いよく流れている。

閑（しづ）かさや　岩にしみ入る　蝉（せみ）の声　（松尾芭蕉）

夏の盛りのころ、ひっそりとした静けさの中で、ただ、せみの声だけが、岩にしみこむように聞こえ、いっそう静けさが感じられる。

夏草（なつくさ）や　兵（つわもの）どもが　夢（ゆめ）の跡（あと）　（松尾芭蕉）

奥州平泉（おうしゅうひらいずみ／今の岩手県）の館（やかた）、ここは昔、源義経（みなもとのよしつね）とその家臣の武士たちが戦った場所である。時はたち、今となっては武士たちの夢はあとかたもなく消え去ってしまった。ただ、一面に夏草がしげっているだけである。

金亀虫（こがねむし）　なげうつ闇（やみ）の　深さかな　（高浜虚子（たかはまきょし））

夏の夜、家の中に飛び込んできた一匹のこがね虫を、えんがわから外に放り投げたら、こがね虫は、深い闇の中へと吸い込まれていった。こんなに深々とした闇が、身近にあったのだ。

五月雨や　大河（たいが）を前に　家二軒（いえにけん）　（与謝蕪村（よさぶそん））

しとしとと降り続く五月雨のために大河は水かさを増し、激しい勢いで流れている。激しい流れの大河を前に、岸にはたよりなさそうな家がただ二軒、心細げに建っている。

読んだ数（〇で囲む）	
11	1
12	2
13	3
14	4
15	5
16	6
17	7
18	8
19	9
20	10

	よい姿勢	すらすら読む	俳句の暗唱	意味が言える
私の評価（◎・〇・△）				
先生の評価（◎・〇・△）				

（◎　とてもよい　　〇　よい　　△　もう少し）

音読

俳句のリズムを感じ取りながら音読や暗唱をしましょう

年

名前

俳句３（秋をよんだ俳句）

俳句（はいく）とは五・七・五の十七音から成るものです。季節や風情、歌に込めた思いなどを思い浮かべたり、俳句がもつリズムを感じ取ったりしながら読みましょう。

柿食（かきく）へば　鐘（かね）が鳴るなり　法隆寺（ほうりゅうじ）　（正岡子規（まさおかしき））

法隆寺の茶店（ちゃみせ）で休んでいた。名物の柿を食べていると、法隆寺の鐘が静かに鳴り響いてきた。

朝顔（あさがお）に　つるべ取られて　もらひ水（い）　（加賀千代女（かがのちよじょ））

朝早く、井戸に水をくみに来てみると、朝顔のつるがつるべ（井戸の水をくむためのおけ）にからんで伸びている。つるを切ってしまうのはかわいそうで、となりの家に水をもらいに行った。

秋深き　隣（となり）は何を　する人ぞ　（松尾芭蕉）

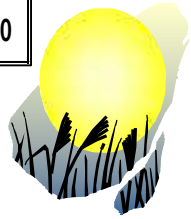
秋も深まってきた。ひっそりとしている隣の人は、私と同じように寂しい思いをしているのだろうか。ひっそりと物音も立たないが、何をしているのだろう。

桐一葉（きりひとは）　日当たりながら　落ちにけり（高浜虚子（たかはまきょし））

秋の静けさの中、明るい日当たりのよい場所で、桐（きり）の葉が一枚、日の光を受けながらひらひらと落ちていった。

名月（めいげつ）や　池をめぐりて　夜（よ）もすがら　（松尾芭蕉）

中秋（ちゅうしゅう）の名月の夜、美しい月を映す池の辺りを散歩して、このすばらしい風景を楽しんでいたが、ふと気がつくと夜通し歩いてしまっていたことだ。



読んだ回数（○で囲む）	
11	1
12	2
13	3
14	4
15	5
16	6
17	7
18	8
19	9
20	10

	よい姿勢	すらすら読む	俳句の暗唱	意味が言える
私の評価（◎・○・△）				
先生の評価（◎・○・△）				

（◎　とてもよい　　○　よい　　△　もう少し）

音読

俳句のリズムを感じ取りながら音読や暗唱をしましょう

年

名前

俳句４（冬をよんだ俳句）

俳句（はいく）とは五・七・五の十七音から成るものです。季節や風情、歌に込めた思いなどを思い浮かべたり、俳句がもつリズムを感じ取ったりしながら読みましょう。

いくたびも　雪の深さを　尋（たず）ねけり　（正岡子規）

雪は、いったいどのくらい積もったのだろう。自分は病（やまい）にふせって起き上がれないので、何度も家の人に雪がどれくらい積もったのかを尋ねたことだ。

いざ子ども　走りありかん　玉霰（たまあられ）　（松尾芭蕉）

さあ、子どもたち。外に出て走ろう。玉のような霰（あられ）が降ってきているぞ。

うまさうな（そ）　雪がふうはり（わ）　ふうはりと（わ）（小林一茶）

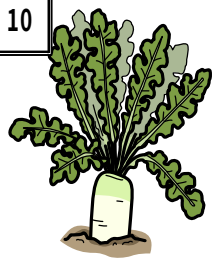
手にとって食べたら、いかにもおいしそうな雪が、空から舞い下りてくる。ふんわりやわらかそうに、ふうわり、ふうわりと。

斧（おの）入れて　香（か）におどろくや　冬木立（ふゆこだち）　（与謝蕪村（よさぶそん））

かれ木のようになった冬木立の中、一本の木を切り倒そうと、斧（おの）を勢いよく入れたら、思いがけなく新鮮な木の香りがただよった。

大根（だいこ）引き　大根で道を　教（え）へけり　（小林一茶）

農民が畑で大根を引き抜いていたところ、そばを通った人に道を尋ねられて、今、引き抜いた大根で方角を指し示しながら道を教えた。



読んだ回数（○で囲む）	
11	1
12	2
13	3
14	4
15	5
16	6
17	7
18	8
19	9
20	10

	よい姿勢	すらすら読む	俳句の暗唱	意味が言える
私の評価（◎・○・△）				
先生の評価（◎・○・△）				

（◎　とてもよい　　○　よい　　△　もう少し）

音読

俳句のリズムと言葉を味わおう
俳句音読プリントの学習の手引き

年

名前

俳句の音読の手引き　1

音読で、俳句に親しみましょう

俳句（はいく）とは、五・七・五の三句十七音から成るものです。この短い三句に、季節を表す季語を入れて自然の情景をうたい、作者の思いを表現しています。季節や風情、歌に込めた思いなどを思い浮かべたり、俳句がもつ、リズムを感じ取ったりしながら読みましょう。

俳句の表現の特ちょうを知り、情景を思い浮かべて、音読に生かしましょう。

形式

・五（上の句）・七（中の句）・五（下の句）十七音のリズムで成り立ちます。

古池や　かわず飛びこむ　水の音　（小林一茶）

・字余り、字足らず

十七音より多くなることを字余り、少なくなることを字足らずと言います。

すずめの子　そこのけそこのけ　お馬が通る　（小林一茶）字余り

季語……季節を表す言葉を入れて、内容や背景を表し、詩情を高めています。

閑（しず）かさや　岩にしみ入る　蝉（せみ）の声　（松尾芭蕉）　季語は蝉（せみ）　季節は夏

夏、静かな山寺で、蝉の声が岩にしみいるように聞こえている情景が浮かびます。

切れ字……作者の感動を表したり、一句の調子を整えたりしています。

「や」「かな」「けり」「なり」「ぞ」「か」などが多く使われます。

夏草や　兵（つわもの）どもが　夢の跡（あと）　（松尾芭蕉）

今となっては武士たちの夢はあとかたもなく消え去ってしまった。ただ一面に夏草が、しげっているだけだということを、詩情豊かに述べています。

上の句だけを見て、中の句と下の句を暗唱し、俳句の大まかな内容を言いましょう。

夏草や
五月雨
閑かさ

持っている
シートで句を
かくしてね。

「夏草や　兵（つわもの）どもが　夢の跡」
ここ（今の岩手県）は、昔、源義経とその家臣たちが戦った場所ですが、今となっては兵たちの夢は消え去り、ただ夏草が、しげっているという意味です。

音読

俳句のリズムと言葉を味わおう
俳句音読プリントの学習の手引き

年

名前

俳句の音読と暗唱の手引き　2

プリントの俳句の季語を見つけましょう

音読プリントの「俳句1」には春をよんだものを、「俳句2」には夏、「俳句3」は秋、「俳句4」は冬をそれぞれによんだものをのせています。それぞれの句の季語を見つけてみましょう。季語は、情景を思いえがく手がかりとなります。

春をよんだ俳句

雪とけて　村いっぱいの　子どもかな

梅一輪　一輪ほどの　あたたかさ

赤い椿　白い椿と　落ちにけり

古池や　蛙飛びこむ　水の音

菜の花や　月は東に　日は西に

春を表す主な季語

かげろう・おぼろ月・ひばり・よもぎ・花見・山吹・梅・うぐいす・はまぐり・春雨・柳

夏をよんだ俳句

五月雨を　集めて早し　最上川

閑かさや　岩にしみ入る　蝉の声

夏草や　兵どもが　夢の跡

金亀虫　なげうつ闇の　深さかな

五月雨や　大河を前に　家二軒

夏を表す主な季語

麦の秋・夕立・梅雨・新緑・風かおる・田植え行水・ほととぎす・蛍・青田・金魚売り・虹

秋をよんだ俳句

柿食へば　鐘が鳴るなり　法隆寺

朝顔に　つるべ取られて　もらひ水

秋深き　隣は何を　する人ぞ

桐一葉　日当たりながら　落ちにけり

名月や　池をめぐりて　夜もすがら

秋を表す主な季語

星月夜・夜長・すいか・ひぐらし・紅葉・菊天の川・ぶどう・稲妻・稲刈り・花火・虫

冬をよんだ俳句

いくたびも　雪の深さを　尋ねけり

いざ子ども　走りありかん　玉霰

うまさうな　雪がふうはり　ふうはりと

斧入れて　香におどろくや　冬木立

大根引き　大根で道を　教へけり

冬を表す主な季語

木枯らし・霜・ねぎ・みかん・こたつ・七五三初雪・炭火・たき火・枯葉・北風・雪遊び

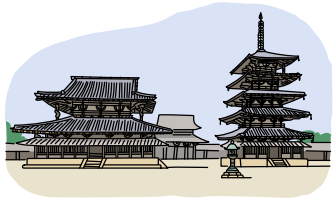
音読

短歌のリズムを感じ取りながら音読や暗唱をしましょう

年

名前

短歌１（奈良時代）　短歌（たんか）とは五・七・五・七・七の三十一音から成るものです。短歌は、短歌１で音読するのは、奈良時代に作られた短歌です。情景や、歌に込めた思いなどを思い浮かべたり、リズムを感じ取ったりしながら読みましょう。



春過ぎて　夏来にけらし　白妙の
衣干すてふ　天の香具山　（持統天皇）

いつの間にか春は過ぎた。いよいよ夏がやって来たらしい。夏になると真っ白な衣を干すといわれる天の香具山に、白い衣が干してあるのが見えるとそう思う。

天の原　ふりさけ見れば　春日なる
三笠の山に　出でし月かも　（阿倍仲麻呂）

広い空をはるかに見上げると、今ちょうど、月が出ている。あの月は、ふるさとの春日の山々の一つ、三笠の山の上で見たなつかしい月と同じなのだなあ。

田子の浦に　うち出でて見れば　白妙の　富士の
高嶺に　雪は降りつつ　（山部赤人）

田子の浦に出て、はるか遠くをふと見上げると、富士の高い峰には、見事に真っ白な雪が降り積もっていることよ。

東の　野にかぎろひの　立つ見えて
かへり見すれば　月かたぶきぬ　（柿本人麻呂）

東の方の野は、朝日で、あかね色の光でそまっているのが見え、西の方をふり返って見ると、月がしずもうとしているのが見える。

読んだ回数（〇で囲む）	
11	1
12	2
13	3
14	4
15	5
16	6
17	7
18	8
19	9
20	10

	よい姿勢	すらすら読む	短歌の暗唱	意味が言える
私の評価（◎・〇・△）				
先生の評価（◎・〇・△）				

（◎　とてもよい　　〇　よい　　△　もう少し）

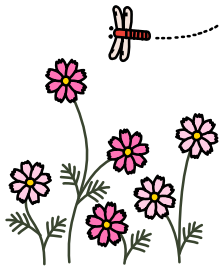
音読

短歌のリズムを感じ取りながら音読や暗唱をしましょう

年

名前

短歌２（平安時代～江戸時代）　短歌２で音読するのは、平安時代から江戸時代に作られた短歌です。情景や、歌に込めた思いなどを思い浮かべたり、リズムを感じ取ったりしながら読みましょう。



秋来ぬと　目にはさやかに　見えねども
風の音にぞ　おどろかれぬる　（藤原俊行）

秋がやってきたと、目にはまだはっきりとは見えないけれども、ふと耳にした風の音に、秋が来たことに、ふいに気づかされる。（平安時代によまれた歌）

ひさかたの　光のどけき　春の日に
しづ心なく　花の散るらむ　（紀友則）

日の光がやわらかく、のどかな春の日であるというのに、どうして桜の花は、こんなにも落ち着かずに散っていくのだろうか。（平安時代によまれた歌）

大海の　磯もとどろに　寄する波
割れてくだけて　さけて散るかも　（源実朝）

大海の岩の多い海岸に、すさまじい勢いで波が打ち寄せている。激しく岩にぶつかり、割れて大きな音を出し、くだけ散っていっている。（鎌倉時代によまれた歌）

しきしまの　やまと心を　人とはば
朝日ににほふ　山ざくら花　（本居宣長）

やまと心とはどういうものかと、人がたずねたならば、それは、朝日に美しく光り輝く、山桜の花のようなものであると答えよう。（江戸時代によまれた歌）

読んだ回数（○で囲む）

11	1
12	2
13	3
14	4
15	5
16	6
17	7
18	8
19	9
20	10

	よい姿勢	すらすら読む	短歌の暗唱	意味が言える
私の評価（◎・○・△）				
先生の評価（◎・○・△）				

（◎　とてもよい　　○　よい　　△　もう少し）

音読

短歌のリズムを感じ取りながら音読や暗唱をしましょう

年

名前

短歌３（明治時代以降）　短歌３で音読するのは、明治時代以降に作られた短歌です。情景や、歌に込めた思いなどを思い浮かべたり、リズムを感じ取ったりしながら読みましょう。

金色の　ちひさき鳥の　かたちして
銀杏ちるなり　夕日の岡に　（与謝野晶子）

秋の夕日に照らされた、丘の上のイチョウの木から、まるで金色をした小さな鳥が舞うように、葉がはらりはらりと散ってゆく。

白鳥は　かなしからずや　空の青
海のあをにも　染まずただよふ　（若山牧水）

白鳥は、ひとりで悲しくはないのだろうか。空の青さにも海の青さにもとけ合うことなく、その白い姿のままただよっている。

東海の　小島の磯の　白砂に
われ泣きぬれて　蟹とたわむる　（石川啄木）

東の方の小島の海岸で、さまざまなことが頭に浮かび、悲しみに涙を流しながら、私はかにとたわむれている。

たらちねの　母がつりたる　青蚊帳を
すがしといねつ　たるみたれども　（長塚節）

久しぶりにふるさとへ帰った夜のこと、母が私のためにと青がやをつって、ねどこを用意してくれた。少したるんでいたけれど、すがすがしい思いで眠ることができた。

読んだ回数（○で囲む）

1	11
2	12
3	13
4	14
5	15
6	16
7	17
8	18
9	19
10	20

よい姿勢		私の評価（◎・○・△）
すらすら読む		先生の評価（◎・○・△）
短歌の暗唱		
意味が言える		

（◎　とてもよい　　○　よい　　△　もう少し）

音読

短歌のリズムと言葉を味わおう
短歌音読プリントの学習の手引き

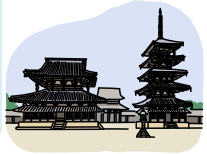
年

名前

短歌の音読と暗唱の手引き

音読で、短歌に親しみましょう

短歌（たんか）とは、日本で古くからうたわれてきた和歌の一つです。**五・七・五・七・七の三十一音**から成ります。自然の風景をよんだり、事実をありのままよんだり、気持ちをよんだりしています。短歌がもつリズムを感じ取ったり、情景を思い浮かべたりしながら読みましょう。



短歌の特ちょうを知り、情景を思い浮かべて、音読に生かしましょう。

形式

・五・七・五（上の句）、七・七（下の句）三十一音のリズムで成り立ちます。

第一句　第二句　第三句　第四句　第五句

秋来ぬと　目にはさやかに　見えねども　風の音にぞ　おどろかれぬる　（藤原敏行）

・字余り、字足らず
三十一音より多くなることを字余り、少なくなることを字足らずと言います。

表現の工夫

・・・短い字数で表現するための様々な工夫が見られます。主なものを紹介します。

比喩や倒置法

金色（こんじき）の　ちひさき鳥（い）の　かたちして　銀杏（いちょう）ちるなり　夕日の岡に　（与謝野晶子）

・**比喩（ひゆ）**・・・たとえてうたうことで、生き生きと実感させる効果があります。
夕日に照らされて銀杏の葉が散ってゆく様子を、金色をした小さな鳥にたとえています。

・**倒置法（とうちほう）**・・・言葉の順序を逆にすることで、意味を強める効果があります。
「夕日の岡に銀杏散るなり」を「銀杏散るなり夕日の岡に」とし、意味を強めています。

句のとめ方や枕詞

天（あま）の原　ふりさけ見れば　春日（かすが）なる　三笠（みかさ）の山に　出（い）でし月かも　（阿倍仲麻呂）

・「かも」でとめることで、月をみて故郷をなつかしむ気持ちを強く表しています。
ほかにも、「けり」「かな」などでとめることがあります。

春過ぎて　夏来（き）にけらし　白妙（しろたえ）の　衣干（ころもほ）すてふ　天（あま）の香具山（かぐやま）　（持統天皇）

・**枕詞（まくらことば）**・・・ある特定の言葉を修飾し、短歌の調子を整え、気分をそえます。
「白妙の」は「衣」にかかるまくらことばで、言葉の調子を整えています。

・**体言止め**・・・しみじみとした味わいが出るように、第五句を名詞でとめた表現
右の歌は、第五句を「天の香具山」でとめています。

※　短歌の暗唱に挑戦したり、短歌の大まかな内容を言ったりしましょう。

音読

長く親しまれている古文の文章の言葉のひびきを味わいましょう

年

名前

古文1

『枕草子』（まくらのそうし）は、清少納言によって書かれた平安時代の随筆（ずいひつ）です。随筆とは、筆のおもむくままに自由に見聞や感想、意見を書きつづる文です。

枕草子

清少納言

春はあけぼの。
やうやう白くなりゆく山ぎは、
少し明かりて、紫だちたる雲の
細くたなびきたる。

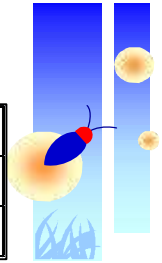
夏は夜。月のころはさらなり、
闇もなほ、蛍のおほく飛びちがひたる。
また、ただ一つ二つなど、
ほのかにうち光りて行くもをかし。
雨など降るもをかし。

（秋は夕暮れ…、冬はつとめて…と続く）

〔解説〕

春は、夜明けがよい。しだいに白んでいく山に接する空が、ほのかに明るくなって、紫がかった雲が細くたなびいているのがよい。

夏は、夜。月が出ているときは言うまでもなくよい。やみ夜であっても、ほたるが多く飛びかっているのがよい。また、ほんの一、二匹が、ほのかに光って飛んでいくのも風情がある。雨が降っても風情がある。



	よい姿勢	よく聞こえる	すらすらと読める	暗唱
私の評価　（◎・○・△）				
先生の評価（◎・○・△）				

（◎　とてもよい　　○　よい　　△　もう少し）

読んだ回数（○で囲む）	
11	1
12	2
13	3
14	4
15	5
16	6
17	7
18	8
19	9
20	10

音読

長く親しまれている古文の文章の言葉のひびきを味わいましょう

年

名前

古文2

『枕草子』は、四季の自然を観察したり、日常生活などを振り返って感想や意見、見聞きしたことが書かれています。言葉のひびきとともに、情景を想像しながら読みましょう。

枕草子

清少納言

秋は夕暮。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、
烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど
飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。
日入りはてて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。
霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、
火などいそぎおこして、炭もてわたるもいとつきづきし。
昼になりて、ぬるくゆるびもて行けば、
火桶の火も白き灰がちになりてわろし。

〔解説〕

秋は夕暮れがよい。夕日が山の端にとても近づいたころに、からすが巣へ行こうと、三羽四羽、二羽三羽などと飛び急ぐのさえも、しみじみとしたものを感じる。まして、かりなどが連なって、とても小さく見えるのは、とても風情がある。夕日がしずんで、風の音、虫の音などが聞こえるのは、何ともいえない。

冬は早朝がよい。雪が降っているのは言うまでもない。霜がとても白いのも、またそうでなくても、とても寒い朝に、火などを急いでおこして、炭を持ち運ぶのも冬の朝にふさわしい。昼になり、寒さがゆるんでいくと、火おけの炭も白い灰ばかりになってきてよくない。

読んだ回数（○で囲む）	
11	1
12	2
13	3
14	4
15	5
16	6
17	7
18	8
19	9
20	10

	よい姿勢	よく聞こえる	すらすらと読める	暗　唱
私の評価　（◎・○・△）				
先生の評価（◎・○・△）				

（◎　とてもよい　　○　よい　　△　もう少し）

音読

古文の文章の言葉のひびきを楽しもう
古文音読プリント１・２の学習の手引き

年

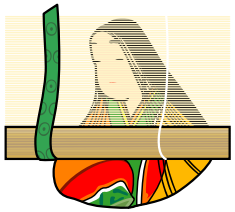
名前

古文音読の手引き

古文の文章の言葉のひびきに親しもう

音読を通して、古文の文章の表現に親しみましょう。

親しみやすい古文の文章を紹介しています。音読をしてみましょう。
音読することによって、文章のリズムや言葉のひびきを感じることができます。
暗唱するくらいに何回も読んで、長く親しまれている文章の美しさを味わいましょう。



昔の人のものの見方や感じ方を知ろう

解説文を読んで、昔の人のものの見方を知りましょう。

古文について解説した文章をプリントに載せています。
解説文を読んで大まかな内容を知り、昔の人のものの見方や感じ方を今の自分と比べてみましょう。

『枕草子』～第一段～　古文音読プリント１・２

作品について

◆『枕草子』（まくらのそうし）は、平安時代中期に女流作家、清少納言（せいしょうなごん）により書かれた随筆（ずいひつ）です。

◆随筆とは、筆者の体験や見聞きしたことを題材に、感想を交えて書いた文章です。

古文１のプリントは、『枕草子』第一段より、「春は曙（あけぼの）」と「夏は夜」の部分を載せています。

古文２のプリントは、同じく『枕草子』第一段より、「秋は夕暮」と「冬はつとめて」の部分を載せています。

◆四つの季節それぞれに、「季節―好きな時間」「その情景や感想」で構成されています。清少納言が、四季のどんなところに感動しているかが分かり、四季に関する日本の伝統的なものの見方や考え方にふれることができます。

枕草子（まくらのそうし）
清少納言（せいしょうなごん）

春はあけぼの。
やうやう（ようよう）白くなりゆく山ぎ（やまぎわ）は、
少し明（あ）かりて、紫（むらさき）だちたる雲の
細くたなびきたる。

春は、夜明けがよい。しだいに白んでいく山に接する空が、ほのかに明るくなって、紫がかった雲が細くたなびいているのがよい。

音読

漢詩のリズミカルな
言葉のひびきを味わいましょう

年

名前

漢文1

『春暁（しゅんぎょう）』は、漢詩（かんし）の一つです。漢詩は、中国の国の伝統的な詩です。漢詩がもつ、力強くリズミカルな言葉のひびきを味わいながら読みましょう。

春暁（しゅんぎょう）

孟浩然（もうこうねん）

春眠不覚暁　　春眠暁（しゅんみんあかつき）を覚（おぼ）えず
処処聞啼鳥　　処処啼鳥（しょしょていちょう）を聞（き）く
夜来風雨声　　夜来風雨（やらいふうう）の声（こえ）
花落知多少　　花落（はなお）つること知（し）んぬ多少（たしょう）ぞ

〔解説〕

春の眠りは心地よく、いつ夜が明けたか気がつかない。
あちらでもこちらでも、鳥のさえずりが聞こえる。
昨夜は雨や風の音が聞こえた。
花がいったいどれくらい散ったことだろうか。

読んだ回数（◎で囲む）	
11	1
12	2
13	3
14	4
15	5
16	6
17	7
18	8
19	9
20	10

	よい姿勢	すらすら読む	漢文の暗唱	意味が言える
私の評価（◎・○・△）				
先生の評価（◎・○・△）				

（◎　とてもよい　　○　よい　　△　もう少し）

音読

漢詩のリズミカルな
言葉のひびきを味わいましょう

年

名前

漢文2

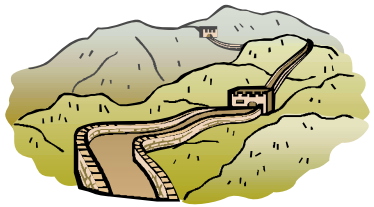
『春望（しゅんぼう）』も、漢詩（かんし）の一つです。音読5で練習した『春暁』と同じように、各行が5つの漢字で成り立っています。訳を読んで、情景も思い浮かべてみましょう。

春望（しゅんぼう）

杜甫（とほ）

国破山河在
城春草木深
感時花濺泪
恨別鳥驚心
烽火連三月
家書抵万金
白頭搔更短
渾欲不勝簪

国破れて　山河在り（くにやぶ　さんがあ）
城春にして　草木深し（しろはる　そうもくふか）
時に感じては　花にも涙を濺ぎ（とき　かん　はな　なみだ　そそ）
別れを恨んでは鳥にも心を驚かす（わか　うら　とり　おどろ）
峰火　三月に連なり（ほうか　さんげつ　つら）
家書　万金に抵たる（かしょ　ばんきん　あ）
白頭搔けば更に短く（はくとうか　さら　みじか）
渾べて簪に勝えざらんと欲す（す　しん　た　ほっ）



〔解説〕
国がみだれ、ほろびてしまっても、山や川は変わりない。
城（長安のまち）には春が訪れて、草や木が深々と生い茂っている。
時代に心を痛めては、花を見ても涙がこぼれ、
家族との別れをうらんでは、鳥の鳴き声にもおどろく。
戦いののろしは、三か月たってもなお続き、
家族からの便りは　万金にも値するほど貴重である。
頭は白くなり　髪をかきわけると短く、
かんむりをとめるかんざしもさせなくなりそうだ。

読んだ回数（○で囲む）	
1	11
2	12
3	13
4	14
5	15
6	16
7	17
8	18
9	19
10	20

	よい姿勢	すらすら読む	漢文の暗唱	意味が言える
私の評価（◎・○・△）				
先生の評価（◎・○・△）				

（◎　とてもよい　　○　よい　　△　もう少し）

音読 漢文の文章の言葉のひびきを楽しもう
漢文音読プリント１・２の学習の手引き

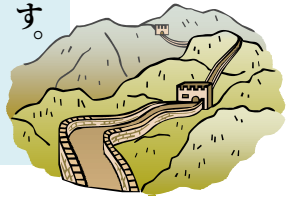
年

名前

漢文音読の手引き

漢詩のひびきに親しもう

漢詩は、中国の伝統的な詩です。ここでは、親しみやすい漢詩を紹介しています。音読すると、漢詩がもつ、**力強くリズミカルな言葉のひびき**を味わうことができます。



暗唱に挑戦しよう！

短い言葉で表現され、リズムがよい漢詩は、覚えやすいと思います。何回も声に出して読み、**ぜひ、暗唱に挑戦してみてください。**暗唱できたら、評価シートに記入しましょう。

昔の人のものの見方や感じ方を知ろう

詩の内容を解説した文章をプリントに載せています。
解説文を読んで、中国の昔の人のものの見方や感じ方などを知りましょう。

『春望』『春暁』　音読プリント

作品について…『春暁』と『春望』は、どちらも、一句の字数が五文字で書かれた詩です。
『春暁』は四句、『春望』は八句から成っています。

◆漢文１のプリント『春暁』（しゅんぎょう）は、中国の詩人孟浩然（もうこうねん　６８９年～７４０年）によって書かれた漢詩です。
音読プリントには、〔原文〕〔読み方〕〔解説〕をのせています。

〔原文〕

春　眠　不　覚　暁

〔読み方〕

春眠（しゅんみん）　暁（あかつき）　を覚（おぼ）えず

〔解説〕

春の眠りは心地よく、いつ夜が明けたか気がつかない。

◆漢文２のプリント『春望』（しゅんぼう）は、中国の詩人杜甫（とほ　７１２年～７７０年）によって書かれた漢詩です。
音読プリントには、１と同じように、〔原文〕〔読み方〕〔解説〕をのせています。

〔原文〕

国　破　山　河　在

〔読み方〕

国破（くにやぶ）れて　山河（さんが）在（あ）り

〔解説〕

国がみだれ、ほろびてしまっても、山や川は変わりない。

漢字で日記

名前

漢字には、それぞれ意味があるよ。
漢字だけを使って言いたいことが伝わるように書けるかな？
みなさんも、漢字だけのかんたん日記にチャレンジしてみよう。

練習しよう

【きのうの食事について】

①どんな意味かな。

朝食米目玉焼↓

②漢字だけで書けるかな。

夕食で魚の骨を食べて痛かった。↓

答えは、
① 朝食は、米と目玉焼きです。　② 夕食魚骨食痛
というふうに自分の伝えたいことを、漢字だけを使って書きます。
文章から、ひらがなを取るとうまくいきますよ。

さあ、やってみよう

【昨日の授業の感想を漢字で書いてみましょう】

（例）　図工作箱合体楽

一

二

三

四

漢字で日記

名前　教師用資料

漢字の力は、漢字を繰り返し使うことで定着していくものです。普段の日記指導などに加えて、楽しく漢字を使い、その意味を考えさせる活動を仕組むことで、漢字に興味をもたせることができます。

【ねらいとする言葉の力】

○ 当該学年までに学習した漢字を読む力
○ 当該学年までに学習した漢字を書く力
○ 漢字の意味を考える力
○ 文字や語句について、辞書を利用して調べる力

【こんなこともできます】

○ 熟語のみを組み合わせて書かせる
○ 漢字ビンゴ
○ 辺やつくりが同じ漢字を集める
たとえば、「てへん」がつく漢字を集める競争など、グループや個人など形態を工夫することも可能です。

さあ、やってみよう

【昨日の授業の感想を漢字で書いてみましょう】

（例）　図工工作箱合体楽

一　算数図形意味不明
二　体育球技三回得点
三　理科実験予想的中
四　国語一回発表成功
五　音楽笛落先生雷